

動物園の知恵

いま北海道・旭川市内の旭山動物園が人気を集めている。何が関心を惹くかと言えば、動物たちのショーや、動物の本能と生態を、上手に引き出し見せてくれるからである。これによって日本全国から草木もなびくがごとく、見物客が旭山動物園へ押しかけ一躍旭山動物園はその名を高めた。これを真似して特定の動物に一芸を仕込み、一枚看板とする動物園まで現れてきた。

しかし、これらの旭山方式が万能かと言えば、そうでもあるまい。見物客が喜ぶからといって、動物たちの生活環境を極端に変えたり、あまりにも奇をてらった曲芸を動物に仕込むことは、動物にストレスを与えるばかりか、下手をすると動物虐待にも繋がりがかねない。出来ることなら動物が本来住むべき生活環境に似た状況を作り出してやり、そこへ放り込んでやれば、それだけで個性的な生態は見られるはずである。

現状は動物たちが徹底して曲芸を押し付けられ、人の目の監視の下にストレスが溜まっている。もっと自然体で動物の生態を見せることにもう一工夫出来ないものだろうか。

フランクフルト市内に市営動物園がある。ごく普通の動物園である。ところが、これが地形と自然環境がマッチして、設計上もよくデザインされている。ライオン園に向かって歩いて行くと、遠くにいたライオンが不意に自分に襲い掛かからんばかりに向かってくることがある。目の前にあるのは植物の植え込みでしかない。ついにわが身もライオンの餌食かと観念した途端、ライオンは行動を止める。よく見ると植え込みとライオン園の間には、深い濠が巧みにカムフラージュされており、ライオンが人を襲うことはありえない。

人間の錯覚とか、死角を巧みに活かし、見物客の目から猛獣との境界線を上手に逸らしているのである。こういう風に自然環境を活かして、動物の普段の生態を間近に見られるように工夫してみるのも、動物園を活性化させるひとつの方法だと思う。